

2020年9月13日 主日礼拝説教要旨:ダビデ物語 ⑥

サムエル記上 20:11~15 「エゼルの石」

高井 卿 介

本日の20章はひとことで言うと、主に在る美しい友情で結ばれたダビデとヨナタンの別れのシーンで、二人が再会するのはこの後一回だけである(23:16)。勿論二人はその事を知る由もありませんが…

### I. ヨナタンを訪ねて(1~10節)

ダビデはベニヤミン領「ラマのナヨト」(牧場の意味)にいた、サムエルの許にサウル王の殺害から逃れるために避難していたが、サウル王の真意を確かめるために、彼の長男ヨナタンを訪ねた。そしてダビデはヨナタンに心の丈を披歴した。

それが有名な「死とわたしとの間はただの一步です」(3節)であった。そこでヨナタンは王の側近たちが集まって食事をする「新月祭」に、敢えてダビデを無断欠席させた。するとサウル王は案の定、烈火の如く怒り「彼は死ななければならぬ」(31節)と叫んだ。

これによってサウル王の真意が明らかになり、ダビデはサウル王から逃げ、追われる身となり、苦しい放浪の旅に出ることになる。

### II. ヨナタンの嘆願(15節)

サウル王が何故ダビデを亡き者にしようとしていたのか？それは彼の油注ぎの意味を知らなくても、彼が次期王に最も相応しいと、サウルは感じていたからである。

勿論、親友のヨナタンもそれを知っていて、複雑な気持ちであったに違いない。何故なら普通なら彼は、サウル王の後継者であって次期王の有力な候補者であったから。

しかし、ダビデが王となるのは神意であることを知ったヨナタンは、父王とは違ってダビデに将来自分の子孫に慈しみを垂れてくれることを願っている。それはサムエル記下9章で実現している。ヨナタンの足萎えの遺児メフィボシエトをダビデが一生面倒を見たことによつてである。

### III. エゼルの石(19節)

本日の20章で見逃せない言葉がある。それは「エゼルの石」である。ヘブライ語では「ハ・エベン・ハ・アーゼル」であるが、「ハ」は定冠詞、「エベン」は「石」、「アーゼル=エゼル」は「助け」で、要するに「助けの石」である。これはダビデとヨナタンだけが知る、秘密の場所の目印とした「石」のことである。

サムエル記には、「エベン・エゼル」(エベネゼル)という地名があり(4:1, 5:1)、そこでイスラエルはペリシテ人との戦いに敗れた。しかし、8章でサムエルは神に犠牲(いけにえ)を捧げて祈った結果、神が雷鳴を轟かせてペリシテに対して勝利した。そこで、サムエルは一つの石を取って、「主は我々を助けてくださった」と言って、その石を「エベン・エゼル」と名付けている(8:12)。

私たちの手許にも「助けの石」(エベン・エゼル)がある。それは私たちが朝に、夕に開いて読み味わっている聖書のみことばである。その聖書のみことばに今までどれだけ私たちは助けられ慰められたことであろうか。